# 教授業と監督業

生物物理学時代の学部生、大学院生　松　田　裕　之

私が学位を取ったのは寺本先生（生前はこのように呼んだことはあまりなかったが、ここではこう呼ばせて頂きます）が理学部長になった1985年だった。

先生の教育法は単純明快で、「何も教えない振りをする」ということだったと思う。いつも20歳になったら自分の人生には自分で責任をもて、が口癖だった。

先生は、朝の講義を始める前に化学教室の実験用の水道から水を飲んでから始めることがよくあった。後で思うに、あれは二日酔いだったに違いない。

私は先生と川崎廣吉さんの指導で、修士１年の頃から「捕食者の餌の切替」の数理模型の解析を進めていた。「そろそろまとめよう」というのだが、こちらは論文のまとめ方など皆目分からない。数式の合間に意味不明の英語を並べた原稿を渡しても全く反応がない。いつの間にか博士課程に入り、重定南奈子さんが米国から帰国し、論文のまとめ方から英語の書き方まで丁寧に指導して頂いた。私の学位は彼女の賜物である。

私の研究は、何をしているかと家族に聞かれてもほとんど説明できないものだった。先生は、学会に行ったら質問しろとか、図表だけはきれいでわかりやすい発表をするように指導された。中でもたいせつなのは独創性であったと思う。突拍子もないことでもいいから、とにかく自分の着想を数理模型で解析することを学んだと思う。たしかに大学院生の頃から論文をたくさん書くような真似は私にはできなかったが、あの経験は後日いろいろな分野に口を出すときに大いに役立った。

学生時代、研究が何も進まぬ焦りを感じていたとき、突然「(この結果を）あんた、どう思う」などと意見を聞いてくる。自分を一人前に見なしてくれた気がして、勝手に自信が芽生えてくる。後日、初めて私が考えた数理模型を説明すると「だいたい良い」と言われてやる気になっていたが、その次に考えたことに対しては、「良いよ」と心から褒めてくれた気がした。後で考えてみると、「それはだめだ」と言うのを聞いた覚えがない。数学的に間違いなら「待てよ」、そうでなければ「よろしい」か「よい」しかなかったと思う。

「次の阪神の監督は誰ですかね」と聞くと「知らん、声を掛けてこない」と答える。どうやら教授より監督に魅力があるらしい。講座対抗のソフトボールで寺本監督は満塁のチャンスに打者と走者に歩み寄り、何の策を授けるかと思ったら「思い切り打たせるぞ」と耳打ちした。打者の川崎さんが力んで凡退したときには、監督としての指導力には疑問を感じた。

博士課程３年を終えて私は、もうこの研究室に飽きたからどこか就職先を探してほしいと不遜な希望を述べていた。私自身に何の業績もないから、公募に際し先生の推薦状だけが頼りだった。先生の推薦状はとても上手だと評判だった。先生は人事に関してきわめて楽観的であった。しかし、本当に就職口を見つけてきて頂いた。就職後に上司とのつきあい方も助言を頂いた。私が今日まで職を転々としても辛うじてうまく行っているのは、先生の助言のおかげである。

私は、教官は何も教えない振りをし、学生は教官からたくさん学んだと思えるような研究室が理想だと思う。もちろん、学生に質問されれば助言するし、学会発表の練習や論文原稿の添削もするが、学生を計算機代わりに使うべきではない。先生が自分の学生から陰口を叩かれるのを聞いたことがない。

心からご冥福をお祈りします。